詩篇 23 篇の黙想：「主は私の羊飼い」（2020 年 5 月 19 日用　TM）

　詩編 23 編を読んでまず、心に響く内容は、「主なる神」を「あなた」と呼びかけ、「わたし」という親密な関係を歌っていることです。その関係を羊飼と羊の隠喩と、敵に追われテントに匿われる主人（友）に客と迎えられる姿と、そして、最後は「主の家」に住まう信仰者と主なる神との礼拝における交わりとして描いています。

１．あなたとわたしの関係：「主は**わたしの**（この私のを省いてはいけない）羊飼い、**わたし**には何も欠けることがない。」（1 節）。「主は**わたし**を青草の原に休ませ/**（わたしを）**憩いの水のほとりに伴い/（2）（かれは）「（わたしの）魂を生き返らせてくださる（ヤーシャーブ）。主は（彼の）み名にふさわしく/**わたし**を正しい道に導かれる。」「死の陰の谷を行くときも/**わたし**は災いを恐れない。」そして、「主」「羊飼」「彼」は 4 節後半で「あなた」となる。「**あなたがわたし**と共に（インマディ）いてくださる。**あなた**の鞭、**あなたの**杖/それが**わたし**を力づける。」（4）「わたしを苦しめる者を前にしても/**あなた**は**わたし**に食卓を整えてくださる。（**あなた**は）**わたし**の頭に香油を注ぎ/**わたし**の杯を溢れさせてくださる。」(5)「（**わたし**の）命のある限り/恵み（トーブ　Goodness）と慈しみ(ヘセド　mercy)はいつもわたしを追う(follow me)。主の家に**わたし**は帰り、生涯、そこにとどまるであろう。（６）なにか、恋愛歌のような「あなた」と「わたし」の深い交わりである。あなたは主なる神にとって「あなた」であり、主なる神はあなたにとって「あなた」であること、私にとって主なる神は「あなた」であることを黙想してみよう。

２．羊飼い　イスラエルにおいて、神とその民との関係は、羊飼と羊の隠喩で語られている。イザヤ 40:11 には、「主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなに小羊をいだき、そのふところに入れて携えゆき、乳を飲ませているものをやさしく導かれる」と言われています。羊飼ー羊の比喩はここでは、神と民との関係というより、極めて親密な個人的、パーソナルな関係である。信仰は知的認識と意志による決断であるが、同時に深い愛の交わりです。羊飼は、季節によってどこに草が生えているかを熟知していて、羊を緑の野原に導き、そこで羊はまた、休み・安らぎをも与えます。また、「いこいのみぎわ」に、つまり、平和に満ちた水辺（静かな水辺）へと連れていきます。その土地の草がなくなると旅をして別の場所に移りますが、時には、恐ろしい薄暗い谷、猛獣が潜んでいるような場所「死の陰の谷」を通る場合もあります。しかし、羊飼はそのむちと杖で外的から羊たちを守ってくれます。

３．わたしには乏しいことがない。「乏しい」ということを意味するヘブライ語「ハーサル」は、want, lack,という英語に当たり、英語では、The Lord is my shepherd. I shall not want. （KJV）です。中学校で want は「欲しい」という意味であることを勉強しましたが、英語で want は「欠乏している」という意味でもあることに気づきました。だから「欲する」のです。この詩は私たちが直面する諸問題を良く知っており、決して「のほほん」とした楽観主義を謳っているわけではありません。「暗い影」（シャルムート）を「死の陰」（シャル　マヴェット）と読ませていますが、死の影の谷、我が敵の前で、など私たちの人生の影を歌います。「わざわいを恐れない」という表現の背後には、もし、主なる神が私たちを守って下さらないなら、まさに私たちの日常はわざわいに捉えられてしまうことを知っていることを示しています。

４．わたしの敵の前で宴をもうけ：5 節～6 節では情景が変わります。隠れるところのない砂漠のような場所で敵に追われると、隠れる大きな岩も頑丈な砦もありません。そのような環境では、そこに張ら

れた小さなテントだけが頼りである。命からがら逃げ込んだテントの主人はあなたを見知らぬ者として追い出すか、あるいは、客人として迎えてくれるかでしょう。あるテントの主人が彼または彼女のテントに入った人を客人であると見做したら、追っ手は手を触れること、そのテントの中に力ずくで押し入ることはできないというルールがありました。ホスピタリティ＝もてなしの心・歓迎精神という言葉の由来：「ホスト」と言えば客をもてなす主人、ポスピタルと言えば「病院」です。ところが、敵対関係、敵意のことをホスティリティ（hostility, hostile）と言うのです。もともと「外国人」「よその人」を意味する言葉がもとになり、よその人を客人として迎え入れることが「もてなし＝hospitality」となり、敵として追い返すことが「敵意＝hostility」となったのです。インドヨーロッパ語で、Ghosti →gest,　host, という言葉が生まれ、なんと、主の晩餐（聖餐）のパンのことを the Host というのです。

主は、私たちがいかに貧しく、神にしばしば敵対するような愚かな者であっても、私たちを「客人」として迎え、頭に歓迎の香油をそそぎ、テーブルを出して宴会を開いて下さり、まあ飲め飲めとぶどう酒をなみなみついでくれる(飲めないわたしはつまらない！？)のです。敵が地団駄踏んでテントの外で身構えようが私はセーフなのです。

５．神殿で礼拝する　6 節では荒れ野のテントからエルサレルの神殿に場面が移り、もっと頑丈な主の神殿にいて、「恵みといつくしみはいつも私を追う」と翻訳されています。英語では follow。自分一人でひた走っているように感じ、恵みといつくしとは無縁であるように感じられたとしてもいつもきちんと私に追いついてくる、フォローの風が吹いて主なる神が押してくださるとは！味わい深い言葉です。2 節と 3 節には、主が「導く」と二度繰り返えされています。新生 554 は「All the way my Savior leads me」ですので、「導く」を強調して翻訳してみました。

1 頁を守って詩編黙想を書いてきましたが、半分削っても 1 頁に収まりませんでした。詩編 23 編を暗唱できたらいいですね。